

5月のおすすめ図書

開館時間 平日・土:9:30~18:00
日・祝日:9:30~17:00
休館日 毎週木曜、毎月第4金曜日、
年末年始
問い合わせ 宇土市立図書館 ☎(22)4512



<p>幼児向け</p> <p>ふわふわパンダ みやもと かずあき / 作 講談社</p> <p>空に浮かぶ雲がパンになった。パンダたちは喜んでパンを集め、みんなで、ぱくぱくぱく。するとパンダたちは、ふわふわふたと、みんなお空に舞い上がった。ふわふわと集まって、雲になって、そのあとは？</p>	<p>小学生低学年向け</p> <p>めいちゃんのまほうのクッキー かなざわ まゆこ / 作 BL出版</p> <p>めいちゃんはお母さんが作るお菓子が大好き。落ちこんだ時も寂しい時も、お母さんのおやつを食べると元気になります。離れて暮らすことになったお父さんのために、めいちゃんはクッキーを作りたい。クッキーのレシピ付き。</p>	<p>小学生高学年向け</p> <p>ばんざい!ぼくらのフシギ島 悩んだら、いつでも来んね 辻堂 ゆめ / 作 主婦の友社</p> <p>夫志木島には、全国から離島留学生が来る。小学6年の涼もその一人。島での生活は楽しいことばかりだったが、身の回りに奇妙なできごとが起り始めた。涼は親友の才津と真相解明に乗り出すが…。子どものためのなぞ解き小説。</p>
<p>中学生向け</p> <p>ぼくがぼくであるために 蒼沼 洋人 / 作 ポプラ社</p> <p>女の子みたいと言われる男子中学生・アキ。“男らしく”ありたいと思っていたアキだが、友人・眉村のある言葉に、信じるべきものを見失いはじめ…。本当に大切なものは何かを知っていく物語。</p>	<p>一般向け</p> <p>夜明けのハントレス 河崎 秋子 / 著 文藝春秋</p> <p>大学生のマチが出合った狩猟の世界。新人ハンターとして歩を進める彼女の前に、一頭の熊が現れ…。ある女性ハンターの誕生と葛藤、そして熊との真剣勝負を描いた、令和の狩猟エンタメ。『週刊文春』連載を単行本化。</p>	<p>一般向け</p> <p>寄せ植えのはじめかた 1鉢でも楽しめるガーデニング 主婦の友社 / 編 主婦の友社</p> <p>寄せ植えは自由な発想で作れるコンパクトで楽しいガーデニング。寄せ植え作りの準備から作りかた、管理のコツまでを写真で解説します。まねしたい寄せ植えのお手本も紹介。『園芸ガイド』等掲載に新規の記事を加え再編集。</p>

「たのしい絵本展」を開催します。

期間:5月13日(水)~5月27日(水)

場所:宇土市立図書館 1階 郷土資料室

入場無料 予約不要

絵本展内容
テーマ『食育』 ~食について考えよう!~

食育とは、食に関する知識と健全な食生活を実践する力を育むことです。
今回の絵本展では、子どもから大人まで、より分かりやすい絵本を展示します。ぜひ、この機会に食について学んでみませんか?

ブックトークはじめました!

ブックトークとは…?
様々なテーマに沿って選んだ本をみなさんへ紹介するものです。
新たな本との出会いのきっかけになるよう、おすすめの本をたくさん準備しています。ぜひお気軽にご参加ください!

ブックトーク実施日

1. 図書館職員による水曜日のこどものおはなし会
2. 毎月第4火曜日の0.1.2歳のおはなし会

第138回 温故知新 くと学だより

日本統治時代「台南」で活動した宇土人

図文化課文化係 ☎(23)0156

台南で活動した宇土人

湯徳章(本号6ページ参照)の父・坂井徳藏(旧宇土町出身)は、明治二十九年(一八九六)頃に日本統治初期の台湾へ渡り、警察官として台南の治安維持に尽力しました。

今回は、同時期に台南で新聞記者や通訳官として活動した二人の宇土人を紹介します。

矢嶋篤政と台南活版舎

旧宇土町出身で明治元年(一八六八)生まれの矢嶋篤政は、宇土小学校卒業後、済々黌などを経て、明治二十六年(一八九三)、九州日日新聞社(現在の熊本日日新聞社)に入社。日本の台湾領有直後の明治二十八年(一八九五)、同社の台南駐在通信員として三角から台湾へ渡り、「臺南通信」などの台南に関するニュースを数多く発信しました(資料1)。

渡台の翌年には、九州日日新聞の台南支社として印刷会社「台南活版舎」を設立しましたが、明治三十二年(一八九九)に志半ばで病死しました。

奥村金太郎は、矢嶋と同じ明治元年生まれの旧宇土町出身で、同心学舎(済々黌の前身)において中国語を学び、日清戦争後、日本の台湾領有に伴い台湾総督府通訳官に任命されました。矢嶋の死後に台南活版舎を引き継ぎ、明治三十三年(一九〇〇)に日刊紙「台南新報」の発行を開始。明治三十六年(一九〇三)、台南活版舎を株式会社化して「台南新報社」と改称し、常務取締役に就任しました。

明治三十七年(一九〇四)、日露戦争に伴い陸軍通訳官として中国大陸へ渡りましたが、戦後は台南に戻って台南新報社の副社長兼主筆(編集・論説の総責任者)として経営の中枢を担い、大正六年(一九一七)に台南で病没するまで台湾言論界で活躍。「台南新報」が日本統治時代の台湾三大紙のひとつに成長する礎を築きました(資料2)。

「台南新報」のルーツ「九州日日新聞」

矢嶋が立ち上げた台南活版舎は、熊本市に本社をおく九州日日新聞社の台南支社として設立された印刷会社であり、矢嶋の死後は同郷の奥村が会社を引き継いで「台南新報」を発行しました。つまり、「台南新報」は「熊本日日新聞」の前身である「九州日日新聞」にルーツがあったことがわかります。

「台南新報」は、台湾の主要新聞として台南をはじめ台湾で暮らす人々へ最新かつ重要な情報を提供しました。矢嶋と奥村の存在は、日本統治時代の台湾マスメディアや言論界で大きな役割を果たしたと評価できます。

宇土と台南の歴史的つながり

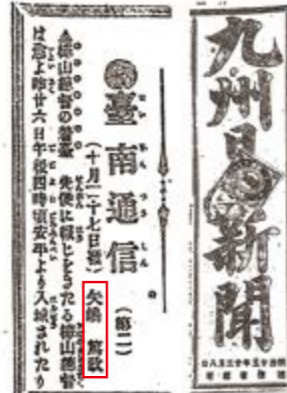
同い年で旧宇土町出身の矢嶋と奥村は、その経歴から互いに連絡を取り合う間柄だったと考えられます。

同じく旧宇土町出身で年も近い坂井徳藏が、矢嶋や奥村と交流があったのか今のところわかっていませんが、いずれにしても日本の統治に抵抗する現地住民や風土病などで生活に苦勞したと思われる台南の地で、警察官や新聞記者、通訳官として懸命に生きることが間違いのないでしょう。彼らの存在は、明治時代から現在へと続く宇土と台南の歴史的つながりの一端

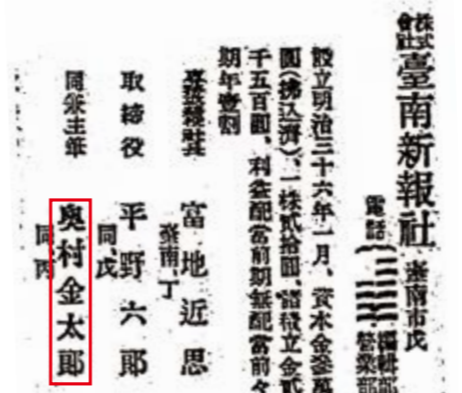
を示しているといえます。

【参考文献】

- 黒羽夏彦 二〇二二「台南新報社成立の背景」『日本台湾学会報』第二四号
- 山室信一 二〇一七『アジアびとの風姿』人文書院



資料1:「九州日日新聞」明治28年(1895)11月15日



資料2:商業興信所編『日本全国諸会社役員録』明治41年(1908)